

SHOW HEY シネマールーム

★★★

オン・ザ・ロック

2020年/アメリカ映画
配給：東北新社/97分

2020 (令和2) 年 10 月 11 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：ソフィア・コッポラ
出演：ビル・マーレイ/ラシダ・ジ
ョーンズ/マーロン・ウェイ
アンズ/ジェシカ・ヘンウィ
ック

👁️👁️ みどころ

夫の浮気疑惑はこんなところから！なるほど、なるほど。しかし、いくら父娘関係が良好でも、父親がここまで浮気調査に張り切るとは！？フランシス・フォード・コッポラという偉大な父親と、その娘ソフィア・コッポラなら、ひょっとしてそれもあり・・・？

ニューヨークの街を舞台としたそんな脚本は、ウディ・アレン監督ばりのおしゃれなものだが、ちょっと安易すぎる場面も。まあ、それでもこんなハッピーエンドで終われるなら、ある意味、めでたし、めでたし・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ソフィア・コッポラ監督の力量は？■□■

ソフィア・コッポラ監督は、『ゴッドファーザー』（3部作）（72・74・90年）や、『地獄の黙示録』（79年）等で有名な巨匠フランシス・フォード・コッポラ監督の娘として有名だが、監督としての力量は？『ロスト・イン・トランスレーション』（03年）を観ると、相当なものと思っていたが、自分の父親の体験を下敷きにして脚本を書いたと思われる本作は、ウディ・アレン監督ばりの、都会風でおしゃれ、そして皮肉に富んだコメディを目指したようだが、父娘が共同して夫の浮気調査に立ち向かうというテーマと内容、そしてそのオチの付け方はちょっとお粗末・・・？

また、本来主役であるはずの夫ディー（マーロン・ウェイアンズ）の浮気に悩む妻ローラ（ラシダ・ジョーンズ）よりも、その父親フェリックス（ビル・マーレイ）の存在感と演技力が目立ち過ぎているから、それが時として、イヤミな領域にまで・・・？

■□■このオヤジはすごい！娘もタジタジ！その教えは？■□■

2020年の2月以降のニューヨークは、新型コロナウイルス騒動によるロックダウン（都市封鎖）のため、大変な状況になった。さらに、黒人差別を巡る大規模デモのため、

街も時として騒乱状態になったから、大変だ。しかし、本作を観ている限り、ニューヨークはあくまでおしゃれでリッチな街。そのニューヨークの街を、お抱え運転手付きの車で悩める娘ローラを連れまわす父親フェリックスは、その卓抜したアイデア(?)のみならず、人脈も行動力もすごい。

トランプ大統領は74歳にして、バイデン候補も77歳にして元気だが、このフェリックスの御年も、それと同じか少し若いくらいだろう。本作では娘と2人の場面でそんな父親フェリックスが娘に対して語る「男とは・・・」の教えが秀逸。そのため、ストーリーの大半は、その議論(?)を実践するフェリックスに娘のローラが乗っていく姿が描かれる。

しかし、男の私にはフェリックスの「男とは・・・」の理屈は納得できても、女の大半はそれを理解できないのでは?ましてや、父親のそんな価値観のため、幼い頃に母親と共に大いに苦勞したローラが、それをスンナリ受け入れるはずはないと思うのだが・・・。

■□■夫の浮気疑惑は?その調査は?■□■

ある夜の遅く帰ってきた夫のベッドでの行動の不可解さ、出張帰りのスーツケースからの女物のポーチの発見。それは、ローラだけが気になった“小さな疑惑”だったが、私立探偵を含む父親フェリックスの調査によれば、ディーンの浮気は確実!自分の立ち上げた会社を大きくしようと一生懸命に働く男と、その会社内でその男のために懸命に尽くす美人スタッフとの不倫は世の中に一番多いパターンだ。そして、ニューヨーク市内での、父娘揃っての素人探偵の結果、ディーンとフィオナ(ジェシカ・ヘンウィック)との浮気は次第に明確に・・・?

そんな中、遂にフェリックスの予想通り、ディーンからはメキシコ出張の予定がローラに告げられることに・・・。さあ、ローラとフェリックスはどうするの?

■□■ついに浮気現場を押さえたが・・・■□■

フェリックスの人脈は世界中に広がっていたから、ディーンが宿泊するメキシコのホテル(リゾート地?)にもフェリックスの融通が利く知り合いがいるらしい。その結果、ここでも父娘のにわか素人探偵が始まるが、夫の部屋に明かりが灯り、そこに女(フィオナ)の姿が映ると、あくまで探偵気取りの父親とは違い、ローラはつい感情的に・・・。その結果・・・?

ここからの脚本は、さすがソフィア・ Coppola監督とも言える面白いものになっているから、それはあなた自身の目でしっかりと。しかし、私にはそんなシナリオが少し薄っぺらな感じも・・・。

■□■女性の誕生日祝いはいかあるべし!?■□■

女性尊重の国(?)アメリカでは、恋人にはもちろん妻にも、女性の誕生日には必ず夫がお祝いし、食事をともにしながらプレゼントを渡すのが当然。そう考えられているし、フェリックスはそれを実践してきたらしい。ところが、今年のディーンは・・・?

それを気遣ったフェリックスは、2人の子供を抱えて忙しいローラを、誕生日に（無理やり）食事に連れ出し、心のこもった誕生日プレゼントをするから、ある意味、今でも理想的な父親？「実はそうでもない」というのがホントの実態らしいが、少なくとも本作のスクリーン上に見るフェリックスは、今なお（今では？）、少し（非常に？）おせっかいで調子外れながら、ローラの理想的な父親像のようにも見える。そのプレゼントが何かも、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、ローラはその後もずっと本作ラストまでそれを身に着けているから、ローラがそれを喜んで受け取ったことは間違いない。

他方、本作はあくまでホームコメディ風の軽いタッチでできているから、最後のどんでん返し（？）も多少違和感があるものの、それなりに納得できる。まさに、「大山鳴動して鼠一匹」的な結末になるので、それに注目！出張に出かける夫が、ローラの誕生日に渡すプレゼントを“それなりのサプライズ”として2人の娘たちと共に準備していたのは立派だが、それはあくまで第1弾だったらしい。しかして、本作ラストに見るディーンからローラへの誕生日プレゼントの第2弾とは？

まあ、これで夫婦円満のハッピーエンドになるのなら、世の中簡単なものだ。願わくば、本作と同じように米中冷戦も軟着陸できればいいのだが・・・。

2020（令和2）年10月19日記